



二度目の奇跡へ：ポリオ根絶という人類の使命 腕に残る「勲章」と、人類の勝利

第1地域 ポリオ根絶コーディネーター(EPNC) 松田 英郎 (富良野 RC)

1980年、人類は医学史における最大の宿敵の一つであった天然痘を、この地球上から完全に根絶しました。私と同世代の方々であれば、自らの腕に刻まれた「種痘」の跡を覚えているはずです。小さな針がついたスタンプを押し、皮膚を傷つけてワクチンを塗り込むその手法は、決して洗練されたものとは言えません。化膿し、瘢痕として残るその跡は、現代の審美的な価値観からすれば「コスメチック」ではないかもしれません。しかし、その跡こそが、かつて人類を震え上がらせた死の恐怖から私たちが解放された証であり、人類が英知を結集して勝ち取った「勝利の勲章」でもありました。



天然痘の根絶から45年が経過しようとしている今、私たちは二番目のウイルス、ポリオ(小児麻痺)をこの世から消し去ろうとする歴史的転換点に立っています。

ここでもう一人のポールを紹介します。

かつてポリオは、世界中で子どもたちの未来を奪う恐怖の象徴でした。その記憶を呼び覚ます装置が「鉄の肺」です。かつてサンディエゴで開催され世界協議会に参加した際、私は会場に展示されていたその実物を目にしました。学生時代に文献で見て「こんな大きなタンクの中に人を閉じ込めるのか」と驚愕した記憶が鮮明に蘇りました。現在の人工呼吸器の先駆けとなったこの巨大な装置は、かつて日本でも流行時に導入されていました。

2024年3月、この鉄の肺の中で70年以上を過ごした「ポリオサバイバー」のもう一人のポール、ポール・アレクサンダー氏が亡くなりました。彼は感染によって呼吸筋が麻痺しながらも、不屈の精神で弁護士資格を取得し、社会復帰を果たしました。彼の功績は称賛に値しますが、同時に、彼が歩んだ一生がいかに険しく、過酷な闘いであったかを思わずにはられません。ポリオによる弛緩性麻痺は、四肢の自由を奪うだけでなく、呼吸という生命の根幹をも脅かします。その重症度は個体の免疫力や抵抗力によって様々ですが、一人の人生をこれほどまでに縛り付ける病を、私たちは決して看過してはならないのです。ポリオの恐ろしさは、その潜伏性と広がり速さにあります。実際に麻痺を起こすのは感染者の0.1%から1%程度に過ぎません。しかし、残りの99%以上は症状が出ない「不顕性感染」であり、本人が気づかぬうちにウイルスを排出します。つまり、一人の有症状患者が発生したとき、その背後にはすでに1,000人以上の感染者が潜んでいることを意味します。

ウイルスは人間の体内でしか増殖できません。だからこそ、下水道などの環境サーベイランス(監視体制)が極めて重要となります。2024年、パレスチナ自治区ガザ地区において戦闘を一時中断してまでワクチン接種が行われたのは、劣悪な衛生環境下で排出されたウイルスが、無防備な子どもたちの体内に入る連鎖を断ち切るためでした。たとえ戦火の中にあつたとしても、ウイルスは国境も思想も関係なく牙を剥きます。ワクチン接種は、今この瞬間も子どもたちの命を守る唯一の盾なのです。

幸いなことに、ポリオウイルスは抗原性の変化が少なく、かつて日本を救ったワクチンが今なお有効です。しかし、課題は山積んでいます。これまで主流だった生ワクチンは、稀にワクチン由来のポリオを発症させるリスクを孕んでいます。一方、そのリスクを排除した「不活化ワクチン」を世界中に届けるには、莫大なコストと物流網が必要で現実的ではありません。

また、ポリオ根絶は単なる医療の問題に留まりません。安全な水の供給、徹底した公衆衛生教育、そして何よりも安定した社会基盤が必要です。ウイルスを消し去ることは、その国や地域の生活水準を底上げすることと同義なのです。

2031年まで根絶目標が延長されましたが、これは決して敗北ではありません。最後の一步をより確実に、一人の取りこぼしもなく踏み出すための「決意の再設定」であると捉えるべきでしょう。

かつて日本もポリオの流行に苦しみ、当時の母親たちが立ち上がり、生ワクチンの緊急輸入を実現させた歴史があります。現在の日本は、全くワクチン由来のポリオが発生しない不活化ワクチンへと移行していますが、この平和な日常は先人たちのあらがうような努力の上に成り立っています。

ロータリークラブをはじめとする世界ポリオ根絶イニシアチブ(GPEI)が担う役割は、もはや単なる医療支援の枠を超えています。それは、グローバル化の中で失われつつある「他者への献身」を呼び覚まし、地球上のどこに生まれても「呼吸する自由」と「歩む権利」を保障するための平和運動です。ただ、GPEI に対してイギリス政府が 2026 年以降直接的な支援を中止したという報告は極めて残念と言うしかありません。

かつて私が開業した 1991 年、バブル崩壊や湾岸戦争による資材高騰という逆風の中、先人たちは日本の未来を守るために汗をかいてきました。今、私たちが次世代に残すべきは、卑屈感ではなく、世界を救ったという確かな「プライド」です。

ポリオという言葉が歴史の教科書の中にだけ存在する世界を。その実現のために、皆様のさらなるご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。





第2地域 ロータリー会員増強コーディネーター 若林 英博（東京麹町 RC）

突然ではございますが、「コーディネーターニュース」は、今期で一区切りとなり、今後は『ロータリーの友』へ引き継がれる予定と伺っております。前任の野口英一 RMC から引き継ぎ、2025年8月号から本号まで、原稿の取りまとめを担当いたしました。この一年間、ご多用の中で執筆にご協力くださいました地域リーダーの皆さまに、心より御礼申し上げます。お寄せいただいた貴重なご意見や実践例は、読者にとって大切な情報として積み重なり、今後のクラブ活性の一助となるものと確信しております。



さて、4月のクラブ活性化セミナーでは、「会員がやめないクラブづくり」～みんなで語り合おう～をテーマに、退会防止に焦点を当てた参加型プログラムを実施しました。我々 RMC は初日の午後のセッションを担当し、基調プレゼンテーション、分科会、まとめまで、年明けから準備を重ねてまいりました。

特に大切にしたのは、「退会は“届”の話ではなく、心の中で起きている“水位”の話である」という視点です。退会届が出るずっと前から、会員の心には不満、違和感、疲れ、孤立感などが少しずつたまっていくのではないかと。その水位に、私たちはどれだけ気づけているのかを共有しました。

ブレインストーミングでは、「会員のコップの水は、どんな時に増え、どんな時に減るのか」を話し合い、シナリオ演習では、役割や期待、周囲の言葉、小さな出来事が水位に与える影響を考えました。個人ワークでは、「防げた退会・防ぐべきだった退会」を振り返り、各地区で活用できる気づきや実践例を共有しました。

会員増強と退会防止は、両輪です。新しい会員を迎えるだけでなく、今いる会員が価値を感じ、居場所を持ち、ロータリー活動を続けたいと思える環境づくりが欠かせません。退会防止とは、退会届が出てから引き止めることではありません。会員一人ひとりの水位に早く気づき、声をかけ、名前を呼び、役割を託し、感謝を伝え、「あなたが必要です」という思いを届けていくことだと思います。今回の内容が、もっと元気なクラブづくりにつながれば幸いです。

なお、当日の資料やデータは、JAPAN PORTAL SITE に掲載されております。ぜひ各地区でご自由にご活用ください。

あわせて、本誌の発行を支えてくださいました国際ロータリー日本事務局の皆さまにも、厚く御礼申し上げます。



ARC の黒川真一さん(KUROCHAN)、樋口晃さん(GUCCI)、白鳥敬彦さん(Swan)には、ロータリー研究会、活性化セミナーのいずれにおいても、準備から当日の寸劇まで大変お世話になりました。皆さまと一緒に笑いながら取り組めた時間は、私にとって大切な思い出です。心強い仲間に出会えたことに、心より感謝申し上げます。

なお、黒川さんは2025-26年度をもってARCをご卒業されます。これまで本当にありがとうございました。



地域リーダーの醍醐味について

第3地域 ロータリー公共イメージコーディネーター 瀧 満 (中津 RC)

RPIC を拝命し、あっという間の1年が過ぎました。第3地域のガバナー、多くのクラブの皆様を支えられ、私のロータリーライフに新たなページを刻むことができました。任期はあと2年ありますが、地域リーダーの醍醐味をお伝えし、この役職を今から引き継いで頂く事になるロータリー会員の参考になればと考え、この紙面を使わせて頂く事にしました。

《地域リーダーの醍醐味》

1. Global Support Seminar (GSS)

エバンストンのワン・ロータリー・センターでの研修は世界各地から集まった地域リーダー約50名が毎日4コマのセッションを通じて、ロータリーの本質を掘り下げてゆきます。ロータリーの中核的価値観を体現できる最高のセミナーです。

2. ロータリーを俯瞰できるポジション

エバンストンで経験した世界のロータリー会員との交流で、クラブや地区の視点を越えた広い視野でロータリーを見る事が出来るようになりました。

3. 日本のロータリーの運営に携われる幸運

クラブや地区のことしか知らなかった私にとって、日本のロータリー会員全体のために日々尽力されている RI 理事他の多くの役職のご苦勞を目の当たりにし、そのお手伝いができることに誇りを感じるようになりました。

4. クラブ、地区を超えた交流

各地区、各クラブのセミナーや地区大会での講演に招かれ、私の今までの経験やGSSで研修して来た内容を伝えてゆく過程で生まれた全国的なロータリー会員とのネットワークは私の人生を大いに豊かにしてくれました。



最後に、ロータリー公共イメージコーディネーターとしての活動の1コマを紹介させていただきます。掲載の写真は、2720 地区で行われました“ポリオ根絶カラオケチャリティー大会”に参加した一コマです。皆様のクラブでの積極的なイメージアップ活動を期待しております。